

令和5年度 長野県 英語教育改善プラン

目標

CAN-DOリストを用いて領域ごとの達成状況を丁寧に把握し、指導と評価の一体化を進める。学級担任等を対象にした研修を実施して教師の英語力向上を図り、ALT等と英語で伝え合う教師の姿が児童にとって英語学習者のモデルとなる授業を目指す。

1. 現状

改善が進んだ点

- ① CAN-DOリストの活用状況の改善。
【公表】R3:15.8%→R4:33.3%
【把握】R3:58.2%→R4:58.8%
- ② 英語の授業におけるICT機器の活用状況の向上。
・発話や発音などの録音・録画
R3:52.8%→R4:61.6%
・遠隔地の児童等と英語で交流
R3:20.1%→R4:25.7%

未だ改善が必要な点

- ① 「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」のパフォーマンステストの状況。
【実施あり（実施予定を含む）の学校の割合】（5・6年）
R3:92.5%→R4:89.4%
- ② CAN-DOリストの設定割合の減少。
【設定】R3:77.4%→R4:68.6%
- ③ 新規採用者に占める一定の英語力を有する者の割合。
R5目標値38% 達成値18%

2. 分析

- ① 教科書活用研修等においてCAN-DOリストによる目標を児童と共有することや、達成状況の把握を学習評価へつなげる方法について紹介したことにより状況が向上したと考えられる。
- ② 研修等においてICT活用例を紹介したり、市町村教育委員会の要望に応じて実施する「指導と評価の一体化」出前講座でデジタル教科書の活用について説明したりしたこと等により、活用が進んだと考えられる。

- ① パフォーマンステストよりも授業における行動観察から学習状況を評価している教員が多いと考えられる。
- ② 教科化に向けて設定されたものの、現在は実践をしながらCAN-DOリストを見直している学校もあり、現段階では見直しが完了しておらず、「設定している」と回答した学校が減ったと考えられる。
- ③ 免許法認定講習の周知が不十分であることが考えられる。

3. 施策・事業

- (1) 長野県英語教育フォーラム（2月）【①②①②】
小中高の実践事例に学び、異校種間の交流や、CAN-DOリスト等の共有、指導における連携を図る。
- (2) 小学校外国語モデル授業公開の実施【①②】
小学校の教員に加え中高の教員も公開授業に参加できるようにする。授業参観を通し、児童と英語でやり取りをしながら授業を進める具体的な指導方法について学ぶ。
- (3) 担任を主対象とした小学校教員の専門性向上を図る研修会の実施【①②】
・8/7 小学校外国語活動指導力向上研修
・8/8 小学校外国語教科書活用研修
- (4) 小学校英語専科教員研修（県費対象）【①①②】
専科教員が配置されている小学校への必要な支援や助言を行っていくとともに、専科教員だけでなく配置校の教職員全体の指導力向上につながるような支援をし、適切な評価ができるようにする。
- (5) 教育課程研究協議会【②】
教育課程研究協議会において学習者用デジタル教科書の活用について考える機会を設けるとともに、各校の取組事例について情報交換を行う。
- (6) 免許法認定講習（英語）の開設【③】
2020年度の採用から小学校教員の新規採用において、中学校では高等学校英語の免許状を有する者に対する加点制度を導入。臨時的任用職員への周知を図り、2025年まで一定の英語力を有する教員の採用を促進していく。

令和5年度 長野県 英語教育改善プラン

目標

CEFRA1レベル相当以上の英語力を取得または有すると思われる生徒数について、50%を目指す。そのために、①目指す姿に到達するための逆算的な単元構想による授業、②技能統合型の言語活動における適切な指導と評価を基に、生徒の英語力の定着を見届けることができるようになることを目指す。

1. 現状

改善が進んだ点

- ① CAN-DOリストの活用状況の改善。
【公開】R3:23.1%→R4:50.3%
【把握】R3:50.0%→R4:76.2%
- ② 生徒の英語による言語活動時間の割合。
R3:79.7%→R4:87.7%
- ③ 英語の授業における英語担当教師の英語使用状況。
【発話の50%を英語で実施】
R3:80.2%→R4:91.5%

未だ改善が必要な点

- ① 生徒の英語力の状況は向上は見られたが50%には達していない。
R3:42.5%→R4:46.2%
- ② パフォーマンステストの状況については、スピーキングとライティングを両方実施している学校の割合。
R3:91.4%→R4:87.5%

2. 分析

- ① 市町村教育委員会の要望に応じて実施する「指導と評価の一体化」出前講座やモデル授業公開において、CAN-DOリストの活用について普及したことが、公開・把握の向上につながっていると考える。
- ② 左記現状の②・③が連動し、向上していると推測される。小学校で行われているSmall Talkが小中連携の要の言語活動の一つとして帯活動等で定着しつつある。言語活動を授業の中心に据えることを継続して普及してきたことで、教師の英語使用状況も向上したと考えられる。

- ① 生徒の英語力は上昇傾向にあるものの、英語力の定着の見届けについては課題がある。そのため、研修を充実させ指導と評価の一体化に向けた取組を進める。
- ② 発信力を測るパフォーマンステストについては学校による取組の差がある。実施されているパフォーマンステストにおいては、ディスカッションやディベートを実施した学校は少ない状況である。

3. 施策・事業

- (1) 長野県英語教育フォーラム(2月)【①②③①②】
小中高の教員を対象に実施。異校種間の交流や、実践事例やCAN-DOリスト等の共有を行い、指導における連携を図る。
- (2) 授業公開
・中学校外国語モデル授業公開の実施【①②③】
中学校の教員に加え小高の教員も公開授業に参加し、授業参観することで、円滑な小中高の接続を図る。
パフォーマンステストとして、ディスカッションやディベートを実施した学校は少ない状況である。言語活動の高度化に向け、高校の教員からの知見を得る機会ともする。
- (3) 中学校英語授業改善研修の実施【②③①】
・6/15 中学校テスト改善研修
・11/2 中学校外国語指導力向上研修
- (4) 全国学力・学習状況調査の結果分析・活用【①②】
中学校英語「指導と評価の一体化」ワーキンググループを設置し、技能統合型の言語活動、パフォーマンステストの事例を集め、テスト改善ハンドブック(パフォーマンステスト含む)の改訂を行う。
- (5) 教育課程研究協議会【①①②】
全県の中学校の英語科教員が出席する教育課程研究協議会において単元構想や単元末での評価(パフォーマンステスト)とCAN-DOリストを有機的に結び付けている例を共有するなど、各校でのCAN-DOリストの活用を促進する。

令和5年度 長野県 英語教育改善プラン

目標

授業において統合的な言語活動及び観点別学習状況の評価の充実を図り、生徒の英語力を適切に把握することにより、CEFR A2レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒の割合52%の達成を目指す。

1. 現状

改善が進んだ点

- ① CAN-DOリストの活用状況の改善。
【公表】R3:17.1%→R4:92.7%
【把握】R3:17.8%→R4:67.7%
- ② 「書くこと」、「話すこと」両方におけるパフォーマンステストを実施している学校数の増加。
(R3:38.3%→R4:66.4%)
- ③ 求められる英語力 (CEFR A2レベル以上) を有する生徒の割合の増加。(R3:43.8%→R4:50.3%)
- ④ 授業の50%以上英語による言語活動を行っている生徒の割合の増加。(R3:48.5%→R4:59.2%)

未だ改善が必要な点

- ① 学習到達目標の公表及び達成状況の把握については、上昇しているが、把握について目標値には及んでいない。(公表:100%、把握:80%)
- ② 授業における教員の英語使用状況については昨年度から横ばいであり、全国平均(46.1%)を下回っている。(R3:41.1%→R4:41.1%)

2. 分析

①～④の取組により改善が進んだと分析。

- ① 管理職研修や教育課程研究協議会において、CAN-DOリストの意義と活用について説明。
- ② 指導主事による各校の授業参観、英語科職員との懇談及び指導のほか、観点別評価を指導に活かすための「英語スピーキングテスト実践」についての学習会を実施。
- ③ CAN-DOリストに基づく指導やパフォーマンステストの実施により、教員が生徒の英語運用能力をより具体的に評価、把握することができたこと。
- ④ 観点別学習状況評価の充実に向けた授業改善、指導と評価の一体化に向けたパフォーマンステストの実施、1人1台端末の活用に向けた指導・助言。

- ① 英語科教員間で学習到達目標の共有が不十分であること、学習到達目標の活用方法について周知と教員の理解が十分でないことが原因であると想定。
- ② 生徒の実態に応じて平易で簡潔な発話を行うための具体的な方法の普及が十分進んでいないこと、より多くの教員にとって実践しやすい英語による授業の具体例についての周知が不十分であることが原因であると想定。

3. 施策・事業

- (1) 英語指導力アップスキルプロジェクト研修会 【①②③④①②】
 - ア 公開授業、研究会を県内4地区で計画・開催。(4回)
【設定するテーマ(予定)】
CAN-DOリストに基づく授業・評価計画の具体、パフォーマンステストの実践と観点別評価、統合的な言語活動を取り入れた指導方法と授業内容の充実。
 - イ 外部講師による研修(1回)
・英語で授業をするために科目の特性に応じた言語活動をいかに行えばよいかをテーマとした講演会の開催。
 - ウ 他県視察研修(1～2回)
・カリキュラム・マネジメント等において、英語教育について先進的な取組を行っている県外校への視察。
 - エ クラウドや通信による情報発信と学校訪問指導(通年)
・長野県版CAN-DOリストや活用事例、文部科学省作成のパフォーマンステスト資料をクラウド等で共有、周知を図る。
・「アップスキル通信」や指導主事による学校訪問等年間を通して、PDCAサイクルでの授業改善の研究を各協力校で確実に実施することを依頼するとともに、好事例を全県の高校へ発信。
- (2) 教育課程研究協議会(9月、県内4地区開催)【①②③①】
全県の高等学校の英語科代表が出席する教育課程研究協議会において各校のCAN-DOリスト及び4技能5領域の評価計画の報告を依頼するとともに、各校の取組事例について情報交換を行う。
- (3) 長野県英語教育フォーラム(2月)【①③④①②】
小中高の実践事例に学び、異校種間の交流を図るとともに、CAN-DOリストの共有と指導における連携を図る。
- (4) ALT指導力向上研修の実施(11月)【②④②】
授業へのALTの積極的な活用と授業参画を促すため、ALTとJTEの協働による英語で行う授業、パフォーマンステスト実施についての具体について研修し、好事例を共有する。